

総 説

学 士 課 程 教 育 の 今 後 ～アクティブ・ラーニングと学びの空間の視点から～

武 藤 志真子*

The Future of Undergraduate Education in Japanese Universities From the Point of View of Active Learning and Learning Space

Shimako MUTO*

キーワード：アクティブラーニング、プロジェクト学習、ラーニングコモンズ、ICT 支援型、キャリア教育

1. はじめに

我々1944年生まれが高校に進学した1960年度の女子の高校進学率は、55.9%でようやく半数を超えたところであった。4年制大学への女子の進学率に至ってはわずかに2.5%であった。しかし1970年度には高校進学率は80%を超えており、経済成長に伴い10年間に急上昇（いわゆる学校爆発）した。一方、女子の4年制大学への進学率は1970年度ではまだ6.5%にとどまっていたが、2013年度には44.8%となっている。すなわち大学の大衆化が進んできた。これを背景に、1991年には大学設置基準が改定されて、いわゆる大綱化による教育内容の改善・改革をはかるための総合政策が打ち出された¹⁾。これにより各大学は教育理念を反映したカリキュラムを自主的に編成できるようになった。また、日本の大学は入学試験をパスすることは難しいが、入学すると熱心に勉強する学生が少ないという状況を、「学生にしっかり勉強させる」ことに重点をおいて「改善」していくことが目指された。具体的には、学生による授業評価、FD (Faculty Development, 授業内容や方法を改善し、向上させるための組織的な取組, 2008年から義務化)、GPA (Grade Point Average) による学生の客観的な成績評価や出席管理などが取り組まれた。しかし最近の20年間に日本の社会は少子高齢化や経済状況の厳しさの拡大を背景にした社会の活力の低下に加え、グローバル化、情報化、地域間・世代間・個人間の格差の広がりや固定化、産業構造の変化、日本型雇用環境の変容、エネルギー・資源・食料の供給問題など急激な変化が起こっている。このよ

うな社会の変化をみすえつつ中央教育審議会は2005年に、わが国の高等教育がユニバーサル段階（大学全入時代）に入り、学士課程教育の課題は「量的規模」から「質の保証」に移ったことを指摘した。これを受けて2008年の同審議会答申では、質を保証する「学士力」として「知識・理解」、「汎用的能力（経済産業省用語では社会人基礎力）」、「態度・志向性」および「総合的な学修経験と創造的思考力」の4つの構成要素をあげている。すなわち、「転移可能スキル (Transferable Skills)」とも呼ばれる、創造性、柔軟性、自立性、チームワーク力、コミュニケーション力、批判的思考力、時間管理、リーダーシップ、計画性、自己管理能力などさまざまな状況のもとで適用できる高次のスキルであるジェネリック・スキル重視の方向性が打ち出された²⁾。この動きを受けて2012年同審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を養成する大学～」を答申し、ジェネリック・スキル養成に必要な学生の主体的な学修時間の実質的増加・確保と生涯学習を前提とした能動的学修 (Active Learning アクティブ・ラーニング) への転換の必要性を指摘した。

ところで、筆者は40年以上学士課程教育に携わってきたが、専門である保健学分野とともに情報とくに統計処理とコンピュータ・リテラシーの教育を担当し、1990年代と2000年代の大学のユニバーサル化の時代には、この傾向を体現化したかとも言える（食）文化栄養学科の教育にも携わった。このような経験の中で現在、来年度にむけてコンピュータ・情報機器・情報空間のリプレイスを検討中であることから、以下では「アクティブ・ラー

* 健康情報科学研究室, 女子栄養大学: Health Information Sciences, Kagawa Nutrition University

ニング」と「情報・情報化・学びの空間」に焦点をあわせて、その現状と将来について考察してみようと思う。

2. アクティブ・ラーニング

上記では国の高等教育施策を教育審議会の答申を中心に述べたが、要は現代社会で21世紀を支える若い世代に求められる能力が、最近20年の間に大きく変化したということである。都市化、産業化を軸とした近代社会では学校教育が普及・一般化し、若い世代は主として親やコミュニティを超えて「学校教育」から科学や社会の知識を伝達されてきた。しかし「ポストモダン社会」といわれる今日では、急速な社会の変化のため学校教育が文化継承を担う役割についていけなくなっている点がポイントである⁴⁾。若い世代はインターネットや各種のメディアを通して、学校以外でも知識を得ることが容易になり、学校教育で与えられる知識を量・質ともに超えて世界が広がっている。ポストモダン社会で求められる能力や人材は、例えば個性や能動性、ネットワーク形成力や交渉力であり、我々世代とくに高学歴女子に必要とされてきた知的操作の速度、順応性や協調性とは異なる能力が必要となっている。すなわち学校教育は質的転換を求められているのであり、その1つの取り組みとしてアクティブ・ラーニング（以下AL）がとりあげられている。

身近な例をあげるならば、最近の学生にとって「スマホ」は日常の必需品である。「スマホはドラえもののポケットのようだ」と言った人がいたが、日時も場所も検

索でき「目覚まし時計」にも「地図」にもなり、調べたいことがあれば「辞典・辞書」にもなり、打ち合わせや連絡は「ライン」が便利である。多くの学生は机の上にスマホを置いている。スマホで板書をカメラ撮影するのである。これを「授業中はスマホをしまいなさい。」と言え片付くのが教育であろうか。スマホをALにいか活用していくかを考えて工夫する必要があると思う。世界的な大学教育の流れは「学習者中心の教育」、「教員が何を教えたか」ではなく「学生が知識をどのように使えるようになったか」「学生が、何ができるようになったか」に向かっているが、これは個々の教員ではなく組織的（法人単位、大学単位、学部単位、学科単位）に取り組むべきことであり、さらに今後はALの質も検討しなければならない重要なテーマである。

さて、ALを文部科学省の用語集で調べると「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称（以下略）」と定義されている³⁾。溝上は、ALを取り入れたさまざまな授業形態を表1のようにまとめている。また山路はALの多様な方法を図1のように位置づけている。さらにALの質を高める「装置」として、溝上は表2に示すような手法をあげている。溝上が指摘しているように、学生に座学以外の活動をさせていればALというわけではない。体系的な知識なしに見学や体験学習を行っても「面白かった」「頑張った」で終わってしまい深い思考や新しい発想力にはつながらない。普段勉強しない学生やじっと座って話を聞いていられない学生が、調べ学習をしてプレゼンテーションをしたりすると、それだけで満足してしまう傾向があることも指摘されている⁵⁾。筆者も長い教員生活で、普段の勉強が不足している学生ほど学修についての「自己評価」が甘く、「ほめられれば伸びるタイプだ」などと言う傾向がある、と感じてい

表1 各種のAL型授業形態

形 態	例
学生参加型授業	コメント・質問を書かせる フィードバック、理解度を確認 クリッカー レスポンスアナライザー 授業の最初または最後に小テストやミニレポートを書かせる
各種の協同学習を取り入れた授業	協調学習 協同学習（プロジェクト学習）
各種の学習形態を取り入れた授業	課題探求学習 問題解決学習 問題発見学習
PBLを取り入れた授業	Problem-Based Learning Project-Based Learning
その他	ピアインストラクション TBL（チーム基盤型学習）

出典：文献（4）p44による

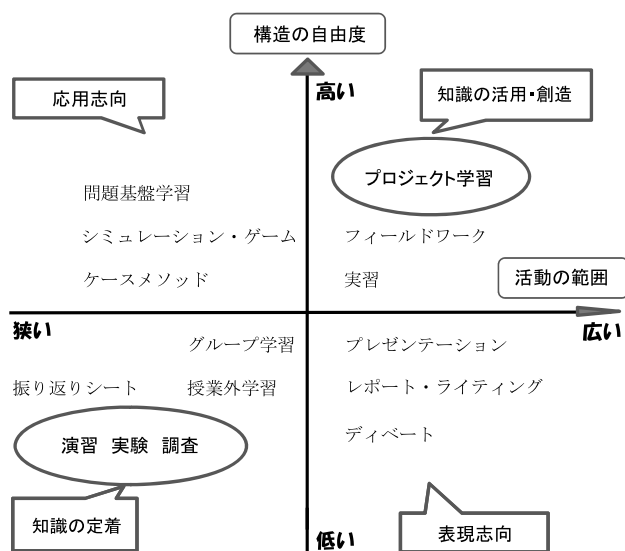


図1 アクティブ・ラーニングの多様な方法

文献（2）p68による

表2 ALの質を高める装置

授 業
書く、話すというアウトプットの活動
コメント用紙、レポート、ディスカッション、討論（ディベート）、プレゼンテーションなど
さまざまな他者の視点を取り入れ、自己の理解を相対化させる
学生同士、教員、専門家、地域住民など外部者
宿題、課題を課す（授業外学習）
レポート、提出物のフィードバック
新たな知識・情報・体験にアクセスさせる
調べ学習、体験学習
リフレクション
多重評価
小テスト、発表、質問、プレゼンテーション、学生同士のピア評価
その他
e-learning による基礎学習・自学自習システム
カリキュラムサポート（他の科目との連携）
導入科目（初年次教育、創生型科目、演習、実験など）と連携
学習支援センター・コーナー
質問・学習相談など
学習環境の整備
図書館、自習室、教室デザインなど
出典：文献（5） p45 による

る。内容が今一つ乏しい発表でも「素晴らしい発表だった」と互いに褒めあって満足している。表2に示した「さまざまな他者の視点を取り入れ、自己の理解を相対化させる」ことも不足している。調べたことを振り返り、意味づけをする表2の中の「リフレクション」が、深い理解につながっていくが、そこまで到達しなければ調べ学習も意味が少ないと思う。ALだからといって体系的な知識が不必要なわけではなく、むしろ細切れでない知識や技能の応用力は不可欠である。

例として、筆者が担当している統計学の講義・実習について言えば、卒研や食文化栄養学実習でアンケート調査（質問紙調査）の結果がよく発表されるが、項目別の人数と割合そしてこれを円グラフで示すことに留まっていることが多い。どんなアンケート調査でも実施すれば人数は得られ、割合は計算できる。このようなまとめ方を「手を挙げたら挙がりました」という結果に過ぎないと、昔私の指導教官はよく叱ったものだった。様々なまとめ方や推計学も講義・実習しているのだが、結局理解・納得・応用力がついてきていないのだと発表をきいてがっかりする。最近話題になっているビックデータを取り扱うデータ・サイエンティストになることまでは目標としていないが、せめて、例えば食品企業に入社した時、ある食物や料理がどんな集団（性別・年齢・勤務や作業内容・健康状態あるいは・ロジャース（Everett M. Rogers）の商品購入の態度5分類など注目したい特性別に）で好まれているかの実態や予測についての企画書がかけろよ

うにはなって欲しいとは思っている。吉成が述べているように「情報を得ることと、それを判断して考えることとは全く別の脳作業」なのだ⁶⁾。

3. プロジェクト学習

全員ではないが、数式をみただけで面倒になってしまいう学生が何人かいる対象への教育には、質の高いALにするには、とくにプロジェクト学習が有効なのではと考えている昨今である。

プロジェクト学習については多くの文献や著作で事例が紹介されているが、美馬・山内はその原則的方法論として以下の点をあげている⁷⁾。「①現実社会との接点を深く意識したテーマを設定する」「②学生はグループで活動し、教員もチーム（2, 3人）で参加する」「③学生は一人ひとり異なる立場をもって参加する」「④最終的に学外の人たちに影響を与えるような学習を設定する」などである。

以下に、本学にも多少関係ありそうなプロジェクトの1つを引用させて頂く。このプロジェクトは「公立はこだて未来大学 (Future University-Hakodate)」での試みである。

テーマ：日本の製品を北米で売るためのインターネットストアを開店する

函館市内で製造販売されている製品を、函館市の姉妹都市であるカナダのハリファクス市でインターネット販売することを目的に、消費者、商品調査、ウェブ・サーバの構築、サイトの企画デザイン、新商品の開発企画提案などを行う。

ここからは余談になるが、筆者は3年前の夏にアトランティック・カナダのノヴァ・スコシア州の州都であるハリファクス市を訪れた。ハリファクス湾に面した広い港は自然の地形からできたものとしては世界で2番目の規模だそう。函館とは、美しい北の港街という共通点がある。カナダ国内では、イギリス人が初めて築いた（18世紀中頃）街である。港街であるからシーフードが豊富で、地元の人や観光客が山のようなムール貝を食べていたのが印象的であったが、イギリス系だからという訳でもないが繊細な味とは言えなかった。他に有名なのは1912年にタイタニック号が氷山に接触して沈没したのが、ハリファクス湾沖である。また、ハリファクスからハイウェイ沿いに世界遺産に登録されているヨーロッパ移民が築いた美しい街を巡ることができる。

だいぶ脱線してしまったが、授業中にアトランティック・カナダの話やハリファクスは「赤毛のアン」の著者モンゴメリが学生時代を過ごした街であることなどに触れたが、「赤毛のアン」の物語を全く読んだことがない学生が多かったので、話は空振りに終わった。話だけでは興味をひかないこと、世代が違うことを実感したのである。

自分に課せられた立場、例えば商品調査をする、に立ってプロジェクトに参加することによって「設定された目

標を達成するためにどのような知識を身につければよいか」を考える状況が必然的に生まれるだろうことが推察される。また、学生同士でも相談し、学びあうであろう。知識を身につける必要性に気づいたとき、本や論文などをデジタル本も含め「読む」機会が増えると思われる。脳神経科医で作家であるサックス教授（Oliver Sacks）は、次のように述べている。『言語の一側面である「読む能力」というものは、たいへん強力で人間に特有なものでしょう。しかしこの能力は進化の直接の産物ではありません。環境の視覚認識のために使われていた能力を利用したものです。類人猿では個々の記号を認識するところまではできても、テキストを読むというのは無理で、これは人類に固有の能力であろうと思います。』さらにサックス教授は教育にとって最も重要な要素について『最も生徒を生き生きと興奮させるのは、先生の情熱です。（中略）教育は消極的であってはならない。もっと積極的に好奇心や想像力、こころの自立ということを刺激するべきだと思います。（中略）プロジェクトを与えたり、提案するといった形での教育がなされるべきではないか。』と述べ、さらに『ただ、想像力と自立を促すかわら、授業時間に遅れないといったような基本となる組織体系も維持する必要がある。』と付け加えている⁹⁾。プロジェクトのような共同学習では、目的に対する緊張関係は創造的な結果に好影響を及ぼすこともあるが、基本となる組織体系を守らないと参加者の間に不必要な緊張関係が起これ、プロジェクトの進行が妨げられるということもある。効果的にプロジェクトを進めるためには、力量のあるコーディネーターの存在が不可欠である。プロジェクト以外にもアクション・ラーニングといって4～8人のグループで問題を抱えている人が問題を提示し、メンバー間で質問と回答を繰り返しながら、問題の本質を探究し、さらに解決に向けての行動計画をたてるといった学習がある。このような学習ではグループについての教員やコーチが、生徒・学生の発言や参加を促すことができるかのファシリテーション力が求められる。教員も他者の授業・グループワークを参観したり、参加して経験を積み、学習してファシリテーション力を身につけることが必要であろう。

4. アクティブ・ラーニング実施上の問題点

図2は平均学習定着率をラーニングピラミッドで表したものである。米国において授業から半年後に内容を覚えていくかどうかを、学習形式で比較したものである。このピラミッドでは下に行くほどALの要素が強まっており、定着率が高まっている⁹⁾。ALはすべての講義科目に導入されるか講義科目とセットとして組み合わせられるべきであるとされている。ところで、表2に示したような「書く」、「話す」、「他者の視点」などのALを取り入れた授業は非常に時間がかかる。予習や課題など授業外学習が必要になる。まして体系的な知識を持つような教育と、創造性を高める共同学習としてのプロジェクト

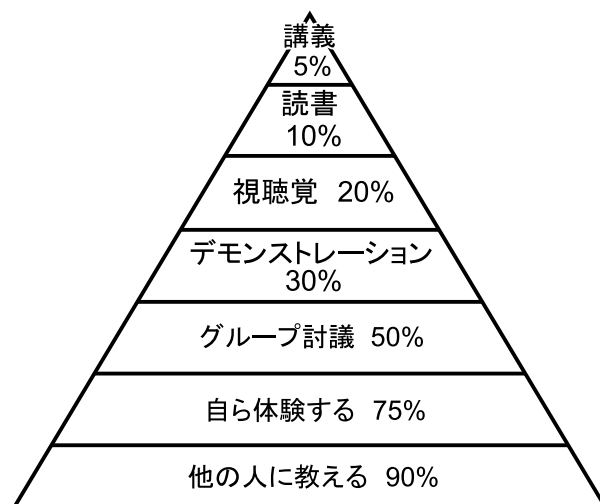


図2 学習方法と平均学習定着率
(USA National Training Laboratories)

文献 (9) p12による

をカリキュラムの中に位置づけて実施することには時間的に高い壁がある。これは、日本の大学教育を変えていく際のポイントであると指摘されている。とくに私立大学の教員は国公立大学の教員に比較して1週当たりコマ数も多く、財政面でも厳しい状況にある。限られた時間、限られた予算の中で質の高いALを行うには、①講義と演習・実習などの一体化した配置などカリキュラムの検討、②知識の習得に並行して行われる4年間連続した知識を活用するAL、③授業外の学習時間など単位制度の実態化、④ALの技能や理解についての教員間の個人差、⑤部外者など他者の視点をとり入れる困難、⑥成果物の評価、など様々な克服すべき諸点がある。驚くことに、2012年にスタンフォード大学のメディカルスクールの教授陣が「講義」の全面廃止を提案したというニュースがある⁹⁾。本学のように知識ベースのマークシート式国家試験合格が、資格取得の要件として必須である学科が多い状況では、「講義」の全面廃止はとうてい無理ではなかろうか。国家試験のしほりが無い食文化栄養学科において、現在の食文化栄養学実習の組み立てを工夫するとともに、知識の構造化のプロセスである深い学習（ディープ・ラーニング）と組み合わせたALを実施していく可能性があるかもしれない。

5. 学びの空間

ALは教員の頑張りだけでは展開が難しく、その重要な要素に空間がある。我々が小学校時代から親しんできた学びの空間は図3のようなハモニカ校舎である。50人前後の学級を収容する均一な教室群で壁によって仕切られた、北側の片側廊下式の校舎である。西側に黒板と教壇があり、机が縦横にキッチリ並べられているので、教員や生徒が自由に歩きまわるには狭い。このような校舎は1895年（明治28年）に三島通良らによって提案された

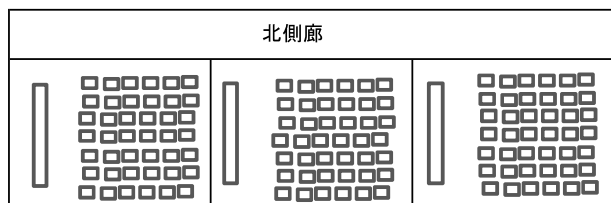


図3 ハモニカ校舎

文献 (10) p24 による

標準型で、最近まで全国に作られてきた¹⁰⁾。

ここでまた余談だが、三島通良は本学の近くの川越市（当時の霞ヶ関村）出身で、帝国大学医学科（現東京大学医学部）を卒業し、学校衛生（学校保健）の創設者と呼ばれる（この点でも養護教諭を養成している本学と関連がない訳ではない）。文部省の委嘱により就学年齢のほか、学校立地、校舎の構造（採光、換気）、飲料水、便所、さらに机、腰掛けなど学校環境を調査して改善指針を示したのである。

さて、少しずつ変化しているとはいえ、講義用の教室はいまだに教師と対面式で机が縦横につまって並べられている様式が殆どである。ある程度の時間をつかって机を並べ換えさせればできなくはないが、自由なグループワークなどには向いていない。しかし1970年代に入ってから日本でも学校空間にオープン・スペースやオープン・スクールが表れ始め、ハモニカ校舎からの脱却がめざされた。しかし教育の改善は校舎といったハードウェアの改善だけでは無理で、教育方法やカリキュラムなどのソフトウェアや、それを誰がコーディネートし実施するのかというヒューマンウェアが必要である。筆者も教室間の壁がないオープン・スペースの小学校を何度か訪れたことがあるが、必ずしも十分使いこなしているとは言えず、隣の授業が聞こえてうるさい、子供たちが騒々しい、という声もあった。しかし、グループ学習やプロジェクト学習、さらには地域など他者に開かれた学習にはオープン・スペースは不可欠であり、物理的・ハードウェアの壁も、教育方法や専門分野といったソフトウェアの壁も、教員間、地域住民といったヒューマンウェアの壁や仕切りを取り外す試みは避けられない。しかしその前に、まず教員たちにオープン・スペースといった空間が生ま

れてきた背景や意味、そしてどのように使うかという使い方を体験してもらい、納得してもらうことが必要である。「はやり」だからといって物理環境的に教員研究室や教室の壁をガラス張りにすれば、「いつも管理者側に監視されているようで、落ち着かない。」という声になる。

6. 学びの空間の事例

教育・研究と連動した学びの空間を前向きな視野で見ると、世界的な研究で有名な米国のボストンにあるマサチューセッツ工科大学（MIT）のメディアラボがある¹¹⁾。1985年に大学院教育・研究組織として設立された、デジタル技術とメディア表現に特化した大学教育の一段上をいくラボである。空間的にはオープン・スペースとともにガラスが多用されフレキシビリティが高いという。研究組織やスポンサー制による運営形態についてはさておき、教育方法としては「ものづくり」やプレゼンテーションが重視されているというが、アメリカの大学院教育のことであるから、絶えずディスカッションとディベートもなされているだろう。筆者は2000年にMITを訪問したことがあるが、メディアラボを訪れなかったことは残念である。

日本の事例としては、2007年に東京大学の駒場キャンパスに「アクティブラーニングスタジオ」が開設された¹²⁾。このスタジオはICT支援型ALを教養教育で行うことを目的に、①フレキシブルな教育空間、②思考素材の提供と支援（映像検索システム、批判的読解力支援システムの導入）、③思考過程の可視化と共有（電子黒板、レスポンスアナライザ、小型ホワイトボード、ワイヤレスプロジェクタ、タブレットPC、LMS（Learning Management System）を導入・設置がデザインの方針となっている。林らは、このスタジオでおこなわれた68の授業を調査して表3のように類型化している。その結果、同じ学習空間であっても教員や授業内容により多様な利用方法があることが明確にされ、空間のフレキシビリティが確認された¹²⁾。

河合塾では2010年と2011年にALについて全国の大学の学科対象の調査を報告しているが、その実地調査報告として、20大学の学部・学科が取り上げられている。ま

表3 アクティブ・ラーニングスタジオにおける授業の類型化

類 型	講義＋ディスカッション型	タブレット PC 活用型	プレゼンテーション型	実 習 型
授業形態	講義，ディスカッション	講義，グループワーク	講義，グループワーク 調査・演習	講義，グループワーク 実習
授業科目	英語Ⅰ 方法基礎（史料論） 物理科学Ⅰ（文化生）	英語Ⅱ 中級英語	基礎演習 方法基礎（データ分析）	生命科学 教材を作って覚える Web入門
特 徴	講義型にディスカッションの要素を追加して授業をより双方向にする点	タブレット PC を使うことで、文章作成や動画の視聴が可能となり個別作業と協調作業を行う点	授業の進度により個別作業や協調作業を行い、最終的に発表を行う点	タブレット PC やクリッカー、LMS などの ICT を利活用して授業を行う点

出典：文献 (12) p115 による

た「共愛学園前橋国際大学（国際社会学科、ラーニングスタジオ・ラーニングコモンズ・コミュニケーションコモンズからなる建物あり）」、「大阪市立大学（経済学部経済学科）」の教員が事例報告をしている¹³⁾。また、平成24年度「私立大学教育研究活性化設備整備事業」として「和洋女子大学」、「武蔵大学」にもICT支援型のAL学習環境が導入された。他にも「国立大学法人九州工業大学」、「大学コンソーシアム石川」、「東京電機大学」、「明治大学 中野キャンパス」など多数のICT支援型AL学習空間の事例が報告されている。

7. ICT支援型AL学習空間の見学

2013年7月末に最近開設されたAL型学習空間を実際目で見て利用の現実についてお話を伺うために、立命館大学衣笠キャンパスの「ピアラ」と同志社大学「良心館」を見学させていただいた。

「ピアラ」は、「学生どうし（Peer）による主体的で創造的な学びのスタイル」をコンセプトにPCリプレイスの機会をとらえ、学部や学内の他機関と連携して、図書館内に2011年4月に開設された。約291m²を3つのエリア（図4）に分け、プレゼンテーションルームは申込み制だが、他の「グループワーク」エリア、「パソコン」エリアと各種の機材は、自由に利用できる。

「グループワーク」エリアには次のような機材が配置されている。①可動式机（東大駒場で導入された勾玉机）・可動式椅子で人数に応じたフレキシブルな支援、②大型ディスプレイ付きPCでリアルタイムの学びの共有化を支援する、③プロジェクターで学びのアウトプットを支援、さらに、多くの国・地域の新聞をリアルタイムに閲覧することが可能な④タッチパネルディスプレイ、などである。

「パソコン」エリアには、OPAC（Online Public Access Catalog）など情報検索機能を備えた固定式情報端末を配置。

プレゼンテーションルームは1コマ（90分）単位の利用で申込み制である。部屋をガラスで仕切り学びを可視化できるようにしている。ゼミなどでの発表練習や学生の自主ゼミなど主にグループで利用している。他にノートPC（90台）の貸し出しや無線LANの整備により場所にとらわれずに自由なまなびができるように考慮されている。なおピアラの利用率は上昇傾向にあり、14時の

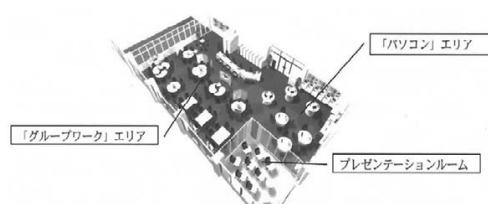


図4 立命館大学 ピアラのエリア配置

定点観測で平均51.3名が利用している。我々が訪問した時も、レポート提出期限が近いせいもあったかもしれないが、たくさんの学生が利用しており、自由な学習空間の割には、話し声は気にならず、騒々しい感じはなかった。また、空間の色彩は統一感がありおしゃれであった。機材のメンテナンスは情報部門で対応し、入退出はICカード化したゲートがある。

同志社大学今出川キャンパス、良心館のラーニング・コモンズは2013年の4月にオープンしたばかりの新しい建物の2、3階を占め、2,550m²と国内最大である。2階は「クリエイティブ・コモンズ」と名付けられ、「学びの交流と相互啓発」をコンセプトにしている。「ヒト・モノ・コト・情報との出会いによるクリエイティブな刺激を生み出す」ことを目指している。3階は「リサーチ・コモンズ」と名付けられ、「アカデミックスキルの育成空間」をコンセプトにしている。「生まれたアイデアを組み立て、他者に分かりやすくメッセージとして伝えていくスキルの育成」を目指している。各エリアは間仕切りのないフレキシブルでオープンな空間である。その空間の中にはPCはもちろんプロジェクター、ワイドスクリーン、電子黒板、HDカメラ、録画機能、マイク、スピーカー、TV会議設備などが配置されている。「何ができるか」ではなく「何がしたいか」で使い方が決まるというのがキャッチフレーズである。広い空間を生かした様々な仕掛けが用意されているが、「グループワーク」エリアには日本の文化を留学生にも知ってもらえるような畳のエリアもある（図5）。また、仲間とリラックスした打ち合わせができる「インフォダイナー」というエリアがあり、短焦点のプロジェクターで壁に画像を映しながら白板上で書き込めるといったアナログ&デジタルの表現でアイデアを形にできるとともに、「ファミレス風」のボックス席で居心地がよいと学生に人気があるという（図6）。また、床の色で区別されている飲食可のスペースもある。もう1つの特徴は、サポートスタッフが多いことである。

アカデミック・インストラクターやライティング・インストラクター、学習指導コーディネーター、情報検索アシスタントなどがいて学術論文の読み解き方やレポー



図5 同志社大学の和のグループエリア空間



図6 同志社大学インフォダイナー

トの書き方、プレゼンテーションの指導、リハーサルのチェック、最新機器の使い方、デジタル編集の仕方などについて指導や相談に乗ってくれる。大半は大学院生のTAが担当しているが、若手の教員が担当してくれるコーナーもある。開設されたばかりなので、学習効果についての検証はこれからであるが、このような学習空間が学士課程の教育をどのように変え、社会の変革をリードしていくような創造的人材を育てていくのかの報告が待ち遠しい。

8. おわりに

半数が大学以上の学歴をもつ「ポストモダン」の学士課程教育は、卒業後に社会や日本の産業を支える職業人を育てるキャリア教育と無縁ではいられないであろう。日本経済の地盤沈下と若い世代の価値観の個人化や小粒化について政財官が危機感を覚えたことが、「大学教育の質的転換に向けて」の動きにつながっていると思われる。本学はもともと女子の教育、食と健康に関する職業人を育てることを目指してきたのであるから、言葉はともかく「キャリア教育」に特化することを明確にしたほうがよいかもしれない。我々世代が定年退職すれば、教員はみな第二次世界大戦後生まれ、「学校爆発」後の教育を受けてきたので、ちょうど良い節目であろう。

「キャリア教育」にはICT教育は一層不可欠である。「アカマイ社」は誰も知らないインターネット上最大の会社で、インターネットインフラを支えている。MITの教授で「アカマイ社」の取締役であるトム・レイトン

(Tom Leighton) は、「将来は全て携帯型機器に移行する」、「教育はオンライン化を避けられない（もちろん対人教育がゼロになるわけではない）」と述べている¹⁴⁾。急速な情報社会の変化の中で、将来のことは不確定な部分が大ではあるが、情報獲得とコミュニケーションの便利なツールとして一度獲得したインターネットの利用が後退するとは考えられない。

保健・情報グループの代表として、坂戸コンピュータ室の責任者として、来年度のリプレースにあたって提言をすることは筆者の最後の責務であろうと思う、ALスペースを含めて学園側に提案をしたいと考えている。

参考文献

- 1) 溝上慎一：カリキュラム概念の整理とカリキュラムをみる視点. 京都大学高等教育研究第12号, 153-162 (2006).
- 2) 山路弘起, 川越明日香：国内大学におけるアクティブラーニングの組織的実践事例. 長崎大学大学教育開発センター紀要 第3号, 67-85 (2012).
- 3) 文部科学省：用語集, 37 (2012) http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf
- 4) 溝上慎一：アクティブ・ラーニング導入の実践的課題. 名古屋高等教育研究 第7号, 269-287 (2007)
- 5) 溝上慎一：アクティブ・ラーニングとは, kawaijyuku Guideline, 44-45 (2010)
- 6) 吉成真由美：まえがき. 知の逆転 (吉成真由美インタビュー編), p2. NHK 出版, 東京 (2012)
- 7) 美馬のゆり, 山内祐平：第1章 空間；公立はこだて未来大学での試み, 「未来の学び」をデザインする. p77, 東京大学出版会, 東京 (2005)
- 8) オリバー・サックス：柔らかな脳. 知の逆転 (吉成真由美インタビュー編), p154. NHK 出版, 東京 (2012)
- 9) 河合塾 編著：「一般的アクティブラーニングについて」. 深い学びにつながるアクティブラーニング, pp12-13, 東信堂, 東京 (2013)
- 10) 美馬のゆり, 山内祐平：第1章 空間；学びの場とはこういうところですか？. 「未来の学び」をデザインする, pp34-35, 東京大学出版会, 東京 (2005)
- 11) 文献(10)：第1章 空間；MIT メディアラボ, pp36-53.
- 12) 林 一雅：ICT 支援型ラーニングスペースにおける授業の類型化—東京大学アクティブラーニングスタジオの事例から—. 日本教育工学会論文誌, 34 (Suppl.), 113-116 (2010)
- 13) 文献(9)：第2部 大学からの事例報告. pp247-274.
- 14) 文献(8) トム・レイトン：サイバー戦線異状あり. pp199-255.

